

1月12日(木)

2017年(平成29年)

発行所、東京都千代田区一ツ橋1-1-1
〒100-8051 電話(03)3212-0321

毎日新聞東京本社

ジャンプに懸ける

国際武田田場を目標し、ジャンプの改善に取り組み上村



スキー複合 世界目指す上村亮介

周囲に「無理」と言われながらも、ノルディックスキー複合を始め、階段を駆け上がった選手がいる。スキー距離が専門だった上村(かみむら)亮介(26)は白馬村スキークラブ。幼少期からジャンプに取り組み選手ばかりの複合の世界で、大学卒業後から飛び始めて4年目。持ち前の走力を生かし、日本人では珍しい後半距離で追いつける形で国内上位に食い込むようになってきた。目指すのは2022年の北京冬季五輪。「世界で戦いたい」との思いが挑戦を支える。

【江連能弘、写真も】

札幌市で7日に行われた国内ジャンプ大会で、上村はテストジャンパーを務めた。当初、練習する予定だった地元・長野が雪不足との情報を聞き、試合前日にジャンプ台を訪れ、テスト役を申し出た。

始めて日が浅いジャンプを改善するため練習機会を探し、助走の滑りを意識しながら4本を飛んだ。

兵庫県で生まれ、長野県白馬村で育った上村は小学4年からスキー距離を始めたが、白

馬高でも国学院大でも目立った成績は残せなかった。それでも競技を続けたいと願い、卒業後は15年国体を控えていた和歌山県の距離の強化選手として競技環境を得た。その際、日本勢が活躍する複合に魅力を感じ、距離ではなく複合への転向を決めた。家族や友人の「無理だ」「やめなさい」との声を押し切り、可能性に懸けた。

小学生に交ざって小さな台から飛び始め、1年目でノーマルヒルに挑戦したが、空中で手を回すほど危険な状態。それでも転向3年目には「思い切り飛べるようになった」。15年12月の全日本選手権は前半飛躍30位から後半距離で猛烈に追い上げ、優勝した渡部暁斗(北野建設)らトップ

選手に割って入り、5位入賞を果たした。

しかし、昨季限りで和歌山での支援は打ち切りに。白馬に戻り、活動費のためスポンサー探しに時間を割いたため、4年目の今季は十分な練習が積めず、ジャンプも停滞気味だ。昨年12月24日、北海道名寄市で行われた大会は飛躍で60位と出遅れ、後半距離はトップタイムを出したが17位止まり。渡部らワールドカップ(W杯)代表が参戦した翌25日も飛躍で70位と崩れ、距離でも41位までしか盛り返せなかった。

それでも、歯車がかみ合えば飛躍も距離も向上する余地が大きいと考える。「世界を、W杯を転戦し、五輪に出たい」と夢を追い続ける。

大卒後、距離から転向